

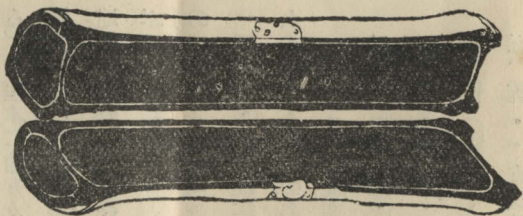
愛書第五輯別刷

古籍保存管見
(漢籍)

吳芳雲



025.7
6600



古籍保存管見 (漢籍)

吳 芳 雲



次に述べる事は私一個人の、匯書に關する私見であつて固より經驗あり卓識ある收匯家の讀むべきことでなく、せいふこれから書籍を收匯しようとする方々の一面の參攷に資する事が出来る、かどうかあやしい。

保存と云ふ事は、これを醫道に譬ふれば、積極的保存は豫防であり、消極的保存は治療である、とても云へようか。治療したり豫防したりする割合には書籍の崩壞が甚しいのである。殊に日光も強く濕氣も多い臺灣では書籍の保存は至難の業であるかの様に、一部の識者の間にても觀念の眼を閉ぢてゐるやうに承つてゐる。しかし僕はそんなに軽くあつかはないつもりである。今例へば、地球を横に二つに割つた其の半球の北方人種が割合にあつさりした食物を獵つて生活してゐるし、南方人種は割合に油ぎつた食物を攝つ

1645

て生きてをるやうな事は誰しも見聞して疑はない事であらう。又北方産の人種が南方へ出稼に行つて、相變らず北方的生活條件食物を無理に保ちながら、生活の不適を啣つやうな事は凡そ適應と云ふ事を知らず、順應を無視した仕方であると云ふ事は名前は思ひ出せぬが、地理學者が已に力説してゐる事である。(比較的北方は南方よりも淺き易いと云ふ事を念頭においての論である)で惟ふに地方々々の特産物と稱されるものはつまりその土地に生活する者にとつて、生活維持(經濟的意味を離れて)必要缺くべからざるものであるから、その特産物を十分利用すれば他地方と異なる方法條件の下に同等の効果を收め得る理由ではなからうか? 彼を推して之に及ぶに、書籍の保存と云ふ一事に就ても、今述べたやうな理窟が當て嵌るやうに思はれてならないのである。結論を急ぐ前に、少しく漢籍の過去をめぐりながら、二三の曼致を試みて見よう。

石經・古來載籍の具、或は文字保存の具として用ゐられたものは大體金・石・絲・竹・匏・

土・革・木八音の名をそのまゝ、擧げる事が出来る。

一、金(銅・鐵等)・鍾、鼎、等の彝器、銘器。

二、石(玉)・石經、石碑。

三、絲(布)・絹卷、絹冊。

四、竹(紙)・竹簡(竹書)紙卷、紙冊。

五、匏・直接的には當てはまるものなし。

六、土・埴(尊、罍、陶)、瓦當。

七、革・(西洋にのみ見る)。

八、木(楮)・木簡、棗版、楮紙。

近年發掘された龜甲獸骨も漏らす事が出来ないものである。

之等の中で長年月の保存に耐ふるものとしては金石が稱用されてをるやうである。特に石は容易に持運びされないと云ふ點で重用されてゐる。今日金文辭の研究、石經の研究は各々その演進の跡を究め盡さんとしてをるものでも分る。而して、狹義に於ける古籍保存の跡を金石に求むれば先づ石經(漢石經、魏石經、唐石經、蜀石經、北宋石經、南宋石經、清石經)であらう。石經の始まりは漢代の熹平石經(一字石經)にして、漢は秦代の後を承けて兩漢經學の極盛時代を作りその「漢學」の名が今でも「支那學」と云ふ名稱と同質に考へられてゐる程であるのだが、此の漢代の經學は秦焚の後を繼いで、今文博士と古文博士が、字形の争ひから學說の争ひにまで進展し、或博士は自分の說に合ふ様に、賄賂を使つて蘭臺の祕室に保匿されてゐる漆書の經字を改めさせた(傳による)と云ふ(宦者呂強)。又蔡邕の傳に邕が、經籍聖人を去る事久しく、文字の誤り多く、俗儒が穿鑿を逞しくし後學を誤らす事が尠くないので、邕の同僚と相謀り、六經文字を正定する事を奏求し、許されて石經の刊刻に取か、つた。之等が漢石經刊刻の由來である。古籍保存觀念の強き發露と言へないだらうか。後歷代の石經刊刻は皆國家の事業となつてをる。

自然的保存・鍾鼎彝器などに残つた文字は、文字そのものよりも、器を保存する爲めに文字が自然に保全されたものと云へよう。異國保存と云ふ事等も自然的保存である。例へば今日徳川時代からつゞいてゐる諸家の家誼漢籍がそれである。曾て塋菴師からこんな事を聞いたことがある。支那本國に於いては朝代の代嬪などに際し兵燹多く、公私の誼書はよくその際に却火の爲めに散佚してしまふが、日本へ傳はつた漢籍は諸藩に分匿されてゐて、完全に残つてゐるのが非常に多いと。

人意的保存・人意的保存は主として布、特に紙のやうな形がくづれ易く、而も部數の多い所謂書籍に就いて苦心が拂なれる事は云ふまでもない事で、彼の支那の尨大なる書籍の數を思ひ浮べる時、更に個人誼書家に想到する時彼等が所誼の保全に如何に血も涙も辛苦を費してゐるかは想像に難くないのである。

今左に孫氏（慶増字名從孫）藏書紀要〔拾本四庫〕〔萬香〕が掲ぐる八則に依據しながら臆見を述べるが書籍の保存に心ある讀者は原書を讀まれる様に薦め申す。

一、購書。書籍の保存は購書に始まる、くどい様ではあるが眞理は永遠に動かない。苦勞した人は此の言葉の味がよく分る。寄贈を受けて書籍が積つた例もあるが、そんな書籍は意に添はぬ、くだらぬ本でもあらうし、又重複も出る。であるから書籍の保存はやはり「購書に始まる」。購書の難き事は別として「購つた書籍を机上に置き、手は芳香を焼き、口は銘茶を啜りながら、悠然

として開卷に及ぶ〔誼書〕など楽しみはこゝに始まり苦勞もこゝに始まる。

二、鑒別。書籍保存に伴ふ鑒別を知らない人の事を誼書紀要は「瞽之辨色、聾之聽音に」譬へてをる。玉石混淆を避ける意である事は云ふまでもないが、單なる賞鑒ならよいとして鑒別と云ふ事になると數萬卷冊の書を眼に見、手に觸れた人でなければ一寸も問題にならぬ。曰く「誰の書は何朝何地の著か、何人の底本に依つたか、何人の收誼を経たか、何で宋元の刻本である事が分るか、南北朝の何時頃の何處で刊刻されたか、何で宋元の精鈔舊鈔本である事が分るか」と云ふ等、及び紙質の良否眞贋、墨の濃淡善惡、詳しく引く事をさけるが、かく鑒別を精しくして惡しきを去り善きを探つて始めて保存寶誼の趣旨が達せられるのである。此の項の中で私が特に注意を引かれたのは次の一條である。

「宋元刻本雖眞。而必原印初刻。不經圈點者爲貴。古人尊重宋刻本。弗輕塗抹。後世庸流俗子。不知愛惜書籍。妄自動筆。有始無終。隨意圈點。良可歎也。」と。

之は宋元の舊本を珍重愛惜する用意から出た言葉であるが、學問的見地からも一考すべき餘地がある様に思はれる。之については別に詳説したいと思つてをる。

三、鈔錄。誼書紀要に曰く、

「書之所以貴鈔錄者。以其便於誦讀也。歷代好學之士。皆用此法。所以有刻本。又有鈔本有底本。底本便於改正。鈔本定其字畫。於是鈔錄之書。比之刊刻者更貴且重焉。況書籍中之祕本。



爲當世所罕見者。非鈔錄則不可得。又安可以忽之哉。從來有匯書之家。而不奉之爲至寶者也。則其道固不可不講也。」

之が清朝人の鈔本に對する考へである。誦讀に便利だと云ふ事は先きに引いた「貴不經圈點」云云といふ事と關聯して、つまり自分で鈔錄したものに隨意に批點を加へつつ、勉學出来るからである。宋本に限らず一般に、書籍が左程たやすく手に入れない時代の窮措大は、多く抄本によつて立身出世の路を講じた。翻讀による原書の崩壞を防ぎ、入手し難き書籍を保存する理由のあるのは蛇足するまでもない。

四、校讐。校讐が古書保存に役立つたのは遠く漢の時代に溯つて語らねばならぬが、校讐學が一つの學問として成長したのは極く近世の事に屬する、否むしろこれから確立せねばならぬ學問である。清の章實齋（學誠）の校讐通義、現代の陳援菴（垣）の元典章校補釋例等がこの學の鏘鏘たるものである。漢代の頃板本少なく異說多い時は勿論、板本の多くなつた後の時代は尙更、抄本刻本の校勘等と、校讐學が古書保存に對する貢獻は益々重大性を加へつつあるのである。

五、裝釘。匯書紀要是裝釘について、生地虞山の裝釘の方法を非常に親切に説いてゐるが、それは今枝葉に互るべき問題でないから、たゞ妨害に對する措置に關する箇所だけ摘出して見ると、大體次の様な事がある。

「裝釘書籍不在華美飾觀、而要護帙有道、…裱書面用小粉糊、入椒礬細末於內、…須夏天做、秋

天用、…書套不用爲佳、用套必蛙、雖放於紫檀香櫥匣內匪之、亦終難免、惟毛氏汲古閣用伏天糊裱厚襯料、壓平伏、內用科舉連裱裏、糊用小粉、川椒、白礬、百部草細末、庶可免蛙、然而偶不檢點、稍犯潮濕、亦卽生蟲、終非佳事、糊裱宜夏、摺訂宜春、若夏天摺訂、汗手竝頭汗滴於書上、日後泛潮、必致霉爛生蟲、不可不防、…」

等と糊の配藥については、繰返し説明してゐるやうに、書籍の蛀害はやはり糊に關する事が一番根本問題になつてゐるやうだ。臺灣に於て今日かゝる書籍の唐裝々釘を用ゐる處は一寸ないでせう。いや裱具屋に斯う云ふ事が傳承されてゐる。處變れば品變るとやら、必ずや臺灣獨特の裝釘覺書があるでせうが、誰か秘傳の公開を惜しまない人が文字に著して公開しないものでせうか。

六、編目、之は卽ち書籍目錄を編む事で、目錄が書籍の代りをするものである事は、周知の如し。校讐目錄學と並稱され一つの學を成してゐる點及び書目の多き事等によりても、その古書保存上に於いて如何に必須の役割を演じてゐるか、分るのである。今日目錄を極端に利用した例として明清間の人、浙江・曹溶（字は潔躬號倦圃）の流通古書約（蕙香）の二節を引いて見よう。

「…忠信自秉、然諾不欺之流、書既出門、舟車道路、搖搖莫定、或僮僕狼藉、或水火告災、時出意料之外、不借未可盡非、特我不借人、人亦決不借我、封已守株、縱累歲月、無所增益、收藏者何取焉、予今酌一簡便法、彼此匯書家、各就觀目錄、標出所缺者、先經注、次史逸、次文集、次雜說、視所著門類同、時代先後同、卷帙多寡同、約定有無相易、則主人自命門下之役、

精工繕寫、較對無誤、一兩月間、各齋所鈔互換、此法有數善、好書不出戶庭也。……」

之は極度に唐・杜邕の訓を守り、又借書一紙を借書一癡と改める程神經が尖り、善本の貸出を極度に嫌ふ收匪家の匪書を互に見、互に得んとする爲めの、打開策として設けられた、約束である。

七、收匪。收匪は裝釘曝書と共に、收匪家が一番腐心する處である。虞山の收匪方法を聽かう。

「收匪書籍、不獨安置得法、全要時常檢點開看、乃爲妙也、若安置雖安、棄置不管、無不遺誤、至於書櫃須用江西杉木、或川柏、銀杏木爲之、紫檀花梨小木、易於潮汎不可用、……趁屋高下、置於樓上四面窗櫺、須要通風、窗小櫺大、(八字萬香樓本脫落)樓門堅實鎖要緊密、……古有石倉匪書最好、可無火患、而且堅久、今亦鮮能爲之、惟造書樓匪書、四圍石砌風牆、照徽州庫樓式乃善、……若來往多門、曠野之所、或近城市、又無空地、接連內室厨竈衙署之地、則不可匪書而卑濕之地、不待言矣、……櫃頂用皂角、炒爲末研細、鋪一層、永無鼠耗、恐有白蟻、用炭屑・石灰・鍋繡鋪地、則無蟻、櫃內置春書、辟蠹石、可辟蠹魚、供、血經於中以辟火、書放櫃中或架上俱不可竝、……(萬香樓本放作於)私が此處で特に問題として取上げたい事は、書櫃の製材に江西の杉、四川の柏、銀杏木を用ゐる紫檀花梨等は濕氣が付き易いから用ゐるては不可なりと言つてゐる事である。臺灣ではどうか？臺灣には檜樟の良材が原生林を爲してゐる。之は江西杉、川柏に取つて代り、用ゐらるべきものはなからうか。殊に樟から製出する樟腦角を以つて皂角に代らせ、樟の書櫃を作つて書物を入れ

たらどうか？

檜の蟲害に對する耐久は已に建築物に於いて經驗済である。斯う云ふ風に地の利を利用すれば、との愚見であるが識者はどう考へられるだらうか。濕氣に對する注意は北方の乾燥に引換へ、自ら變つてゐる事は屢々耳にする事である。又臺灣に來てをられる大匪書家はバラピン(或はセロファン)紙を使つて防蟲する事に成功してゐる事、及び廣東の刻書によく見うける丹砂(赤色酸化水銀)を塗つた紅い書扉に、蛀害が及ばない事を發見してゐる事等も早く愛書家のお耳に入れて置きたい事である。

八、曝書。藏書紀要に曰く、

「曝書、須在夏天、照櫃目挨次晒、一櫃一日、晒書用晒板四塊、二尺闊、一丈五六尺長、高凳擱起、放日中、將書腦放上面、兩面翻晒、不用收起、連板擡、風口涼透、方可上樓、遇雨擡板連書入屋內、擱起最便、擡書板上、須要早涼、恐汗手拏書、沾有痕迹……」

等が重用な事である。此の項に關する事は地の東西南北を問はず準用してよい様である。私が「從宜謄日記」中に於いて引用した烏石山房文庫の匪書櫃條款の曝書の方法は、蟲が多い南方の匪書であつたゞけに方法も少しく細微に互つてゐる。

以上八項は匪書紀要に依つたが、原文は勿論こんな簡單なものではない。讀者諒とせよ。

匪書訓。「匪書訓」と云ふものは一見古書保存に重要な役割を演じてゐる様であるが、事實は之程情け無いものはないのである。私は或清朝の學者のかなりな善本及び或る清朝の收匪家の四



025.7
6600

五萬冊に上る匪書が身後間もなく佚亡、遷移してしまつたのを見、聞き、殊に收匪家の方の、子々孫々にまで傳へたいと云ふ、匪書條款を讀んだ時は深く心を衝たれたものである。今有名なる匪書訓を二つ左に節引して見よう。

過激なるもの。唐杜邇家書自題に

「清樸買來手自校、子孫讀之知聖道、鬻及借人爲不孝。」(從宜註、「借人」とは人に貸す事也)

悲觀なるもの。清祁承燦の澹生堂匪書約に

「…聚散自是恒理、卽余三十年來聚而散、散而復聚、亦已再見輪廻矣、今能期爾輩之有聚無散哉、要以爾輩目擊爾翁一生精力、耽耽簡編、……則爾輩又安不竭力以守哉、至竭力以守、而有非爾輩之所能守者、夫固有數存乎其間矣、今與爾輩約、及吾之身、則月益之、及爾輩之身則歲益之、…」

結 語

以上の外蛇足したい事も澤山あるのですが、管見が蛇見にならぬ中に筆を止めておかう。

昭和十年十月二十九日署於臺北南興寓居從宜謄

